

雲仙岳の火山活動に関する火山噴火予知連絡会統一見解

平成6年6月3日

気 象 庁

雲仙岳の火山活動に関する火山噴火予知連絡会の統一見解

雲仙岳では、2月上旬以降マグマが溶岩ドーム表面にでられず、溶岩ドームは高度を高めると同時に、北西から北方向へ成長した。4月下旬には南側へ成長の方向を変えている。このような内的な成長は昨年12月以降の特徴である。溶岩噴出率は、2月以降4月まで約6万m³/日で推移し、それ以降はさらに減少傾向にある。

溶岩ドームの成長の結果、北北西方向への火砕流の流下も始まり、3月19日には湯江川源頭部に火砕流が流下した。最近では火砕流の発生は少なく、流下距離も短いものの、流下方向は西側を除くほぼ全方向へ拡大している。

地震活動は、周辺部では不活発な状態が続いているが、溶岩ドーム付近を中心に昨年以降高い水準を保っている。

地殻変動観測では溶岩ドームの成長に伴い、溶岩ドームの周囲では最大30m以上の変動が観測されたが、5月に入ってから、変動は鈍化している。

このように、本年2月以降溶岩噴出量が小さく、火砕流の頻度が落ちていることなど、溶岩ドームの活動は、最近はやや低下気味である。しかし、山体及び溶岩ドームが不安定度を増していると推定されることから、今後も大きな火砕流が発生する可能性もあるので、引き続き警戒が必要である。

なお、梅雨期を迎えて、降雨による土石流にも一層の警戒が必要である。